# 書評「身の回りから見た　化学の基礎」

坂東　舞

宇治市立大久保小学校　clockwork71@live.jp

**キーワード：化学，化学リテラシー，科学教育**
（受付：2010 年 1 月 7 日）

著者：芝原寛泰（京都教育大学），後藤景子（奈良女子大学）
発行所：化学同人（京都）2009 年 11 月 2 日初版　173 頁　1800 円＋税
ISBN：978-4-7598-1292-3

本書は，「冷蔵庫やクーラーはなぜ冷えるの」「磁石を切るとどうなる？」「ミネラルウォーターってどんな水」等，誰もが一度は抱いたことがあろう日常生活での素朴な疑問を，化学の基礎へと繋げ，平易に解説した入門用テキストである。

架空の家族である化実（けみ）家の日曜日の生活を追い，一家の遭遇する出来事を“化学の眼”で記述し，中学レベルの理科の知識があれば，十分に理解できる内容となっている。

近年，大学入試科目の減少や AO 入試・推薦入試等，入試方法の多様化により，大学生の学力低下が問題視されている。そこで，大学教育レベルに達していない学力不足の学生，高等学校教育課程での未履修科目を抱えた学生を対象とした，リメディアル教育を実施する大学も多い。これらの学生にとっても，あるいは化学に苦手意識を持つ文系の学生にとっても，本書は，化学の基礎を学ぶための最適なテキストである。

第 1 章から第 14 章では，生活の中のさまざまな事象と化学との深い関係性を見出しながら，化学を楽しく易しく学べる構成となっている。各節の冒頭には，ユーモアを交えた家族の会話文が挿入されるなど，化学を知らない学生でも楽しく読めるよう工夫されている。最終章である第 15 章では，新しい物質を生み出すことによって豊かな生活を実現させた科学（化学）技術が，同時に，長い年月をかけ蓄えられた資源を，瞬く間に消費した負の一面を踏まえ，これからの科学（化学）の在り方について読者自身に問いかけている。

科学技術が大きな影響力を与える現代においては，その成果を享受する能力だけでなく，科学の在り方に対して，客観的な判断ができる知識が必要不可欠である。これが，一般的に言われる科学リテラシーであり，日本人の科学リテラシーが世界最低レベルであることは，OECD の調査等からも明らかとなっている。

化学を学ぶことに具体的なイメージが持てない学生，専門課程の化学を前に不安を抱いている学生には，化学の原点を学ぶ機会となり，将来，専門的な化学の内容を学ぶ機会がないという学生には科学（化学）リテラシーに触れるための最適な一冊になるであろう本書を，是非一読してもらいたい。そして，化学の眼，さらには科学（科学）リテラシーを養ってもらいたい。